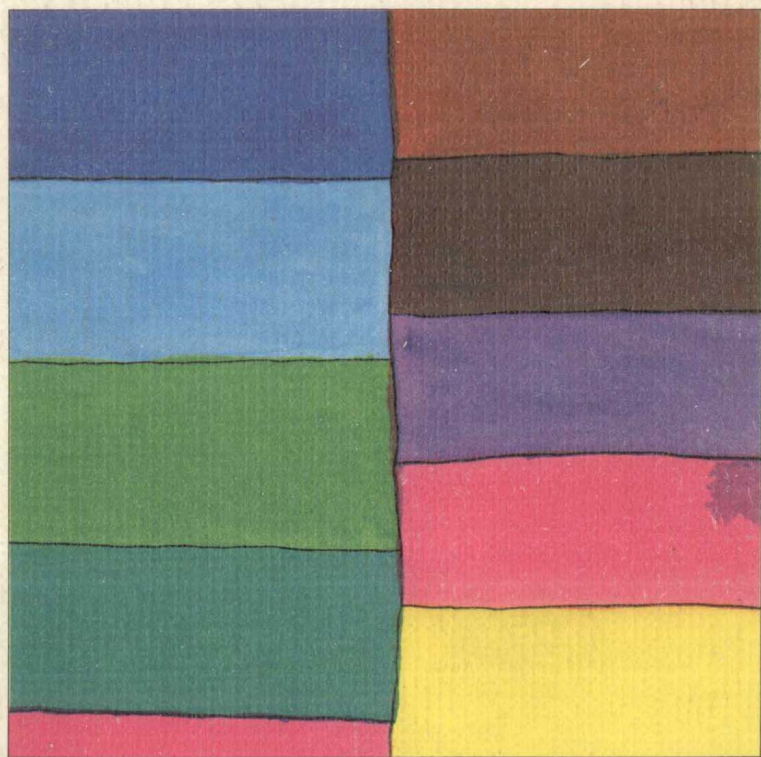


日本の詩  
しごと

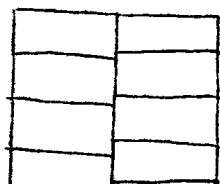


遠藤豊吉 編・著

日本の詩

# しごと

遠藤豊吉 編・著



小峰書店

●編著者略歴

遠藤 豊吉

1924年福島県に生まれる。福島師範学校卒業。  
1944年いわゆる学徒動員により太平洋戦争に従軍、戦争末期特別攻撃隊員としての生活をおくる。敗戦によって復員。以後教師生活をつづける。現在、新日本文学会会員、日本作文の会会員、雑誌『ひと』編集委員。

日本の詩・9 しごと

1978年3月25日 第1刷発行

編著者 遠藤 豊吉

発行者 小峰 広恵

発行所 小峰書店

東京都新宿区舟町6 〒160

電話(03)357-3521(代)

振替 東京6-195544

表紙印刷 合資会社斎藤印刷所

扉印刷 株式会社松本精喜堂

本文印刷 株式会社厚徳社

組版 type & たいぼ

製本 有限会社鬼原製本所

原始から今日まで、人間は働きつづけ、働くことに人間であることのあかしをたててきた。

原始——いまよりはるかに遠い時代。働くということの意味や内容、またその形式はきわめて単純明快だった。生命を保持する。意味は完全にその一点にしぼられ、人間たちは心身の総力をあげて、自然物の獲得にあたった。現代にもむろんその原則は生きている。だが、働くことの内容、形式は非常に複雑化し、ともすれば人間は自分のよって立つ地点を見失いがちになる。

働くということはいったい何なのか。しごととはいったい何なのか。この巻では現代の視点から、人間であることをあかしだてる労働や仕事の所在をさぐりだしてみたい。

遠藤豊吉

日本の詩Ⅱ 9  
しごと

お鶴の死と俺 坂本遼 4

あすこの田はねえ 宮沢賢治 7

野良道 山村暮鳥 12

山芋 大関松三郎 14

霧がひどくて手が凍えるな 宮沢賢治 17

夜苺りの思い出 中野重治 19

讃歌・母の腰 風山瑕生 23

便所掃除 濱口國男 33

おれたちは自然に玩弄される 渋谷定輔 38

日直 清岡卓行 42

絵巻日本捕鯨法 荒川法勝 49

日本の農のアジヤの様式について 真壁仁 57

解説 61

装幀・画 早川良雄

## お鶴つるの死と俺おれ

「おとつつあんが死んでから

十二年たった

鶴が十二になったんやもん」

と云いうて慰なぐさめられてを（お）ったお鶴が

死んでもうた

はじめて氷が張った夜よきやった

わかれの水をとりに背戸へ出て

桶おけに張った薄い氷をざつくとわって

水を汲くんだ

お鶴はお母<sup>か</sup>んとおらの心の中には  
生きたるけんど

夜<sup>よ</sup>おそうまでおかんの肩をひねる  
ちっちゃい手は消えてしもうた

おら六十のおか人を養<sup>う</sup>ふため  
働きにいく

お鶴がながい間飼<sup>こ</sup>ふた牛は  
おらの旅費に売ってしもうた  
おかんとおらは牽<sup>ひ</sup>かれていく牛見て  
涙出た



ほとけ  
仏になつとるお鶴よ

許してくれよ

おら神戸へいて働くど

坂本 遼（さかもと りょう）一九〇四—一九七〇

「たんぼぼ」より。小説「百姓の話」。児童詩の運動にも貢献。

\*

〔編者の言葉〕 親が自分の娘を売り、一家の暮らしをささえたなどということは、いまでは信じられない話かもしれない。だが、戦前の東北地方の農村部では、こんなあわれな話がいくらでもあったのだ。

一九三四年、東北地方は大凶作におそわれ、農民のなかには娘を売るものが続出した。当時、山形県山元小学校に勤めていた歌人教師遠藤友介は、このときのようにすをこううたっている。

「ことしは 三〇エンで たかぐうれだよ」

となみだをのんで 子どもをうったはなしを  
するはおおや そのみだれがみに まっしろい  
わらぼこり

あすこの田はねえ

あすこの田はねえ

あの種類では窒素ちつそがあんまり多過ぎるから  
もうきつぱりと灌水みずを切つてね

三番除草はしないんだ

……一しんに畔あぜを走つて来て

青田のなかに汗拭ふくその子……

磷酸りんさんがまだ残のこつてゐない？

みんな使った？

それではもしもこの天候が

これから五日続いたら

あの枝垂れ葉をねえ

斯ういふ風な枝垂れ葉をねえ

むしつてとつてしまふんだ

……せわしくうなづき汗拭くその子

冬講習に來たときは

一年はたらいたあとは云へ

まだかゞやかな苹果のわらひをもつてゐた

いまはもう日と汗に焼け

幾夜の不眠にやつれてゐる……

それからいゝかい

今月末にあの稲が

君の胸より延びたらねえ

ちやうどシャツツのぼたんを定規にしてねえ

葉尖を刈つてしまふんだ

……汗だけでない

涙なみだも拭ぬぐいてゐるんだな……

君が自分でかんがへた

あの田もすっかり見て来たよ

陸羽りくう一三二号のはうね

あれはずる(じ)ぶん上手(う)に行つた

肥こえも少しもむらがないし

いかにも強く育つてゐる

硫りゅう安あんだつてきみが自分で播まいたらう(る)

みんながいろいろ云(い)ふだらうが

あつちは少しも心配ない

反当たんあたり二三石こく二斗となら

もうきまつたと云つていゝ

しつかりやるんだよ

これからの本統ほんとうの勉強はねえ

テニスをしながら商売の先生から

義理で教わはることでないんだ

きみのやうようにさ

吹雪ふぶきやわづずかの仕事のひまで

泣きながら

からだに刻んで行く勉強が

まもなくぐんぐん強い芽を噴ふいて

どこまでのびるかわからない

それがこれからのあたらしい学問のはじまりなんだ

ではさようなら

……雲からも風からも

透明な力が

そのこどもに

うつれ……

宮沢 賢治（みやざわ けんじ）一八九六―一九三三  
「校本宮澤賢治全集第四卷」より。著書「宮沢賢治全集」他

\*

〔編者の言葉〕 農村地帯に生活しながら、米づくりの方法を知らない、また稲の種類はおろか、タンポポ以外の草花の名を知らないという子どもがふえているという。山形県の小学校の先生は言う。

「なによりも親が百姓仕事をいい仕事だと思っていない。つらい仕事のうえ、現金のはいりぐあいも悪い。政府の政策も農民に好意的じゃない。だからにげる。親がにげ腰になれば子どもだってとうぜん土から離れる。」

苗代なわしろかきするときになつても土にはいろうとしない。だから、自分がまず田んぼにはいり『おまえたちもはいつてこい！』そう言うとおそろおそろはいつてくる。そしてじいさん、ばあさんがド口をあびて米づくりをしたように、手でド口をこねさせる。』

野良道のらみち

こちらむけ

娘達

野良道はいいなあ

花かんざしもいいなあ

麦の穂がでそろった

ひよいと

ふりむかれたら

まぶしいだらう(え)

大かいでっ蒔ふつ葉はをかぶって

なんともいへ(え)ずいいなあ

山村 暮鳥（やまむら ぼちよう）一八八四—一九二四  
「雲」より。著書「山村暮鳥全集」詩集「月夜の牡丹」他

\*

〔編者の言葉〕 日本の子どもたちが野にさく花々に目をむけなくなつて久しいという。しかし、子どもたちは自然を不必要なものとしてほんとうに絶ち切つてしまつたのだろうか。いや、それはちがう。

小さな子どもを郊外の野原につれていく。「さあ、自由に遊べ」と言うと、子どもたちは歓声をあげてほうほうへ散り、草の上をころがる。わたしはシロツメクサで首かざりや指輪を作つてみせる。「わあ、きれい」子どもたちはさけんで、自分たちもそれを作りはじめる。

「わあつ、およめさんだ！」子どもたちは、シロツメクサの首かざりや指輪を身につけてかけまわる。そうなんだ。おもちゃ屋で売っているガラス玉のアクセサリーよりも、ずっとずっとすばらしい飾りなんだ、と興奮してかけまわる子どもたちの姿を見ながら、わたしも興奮するのだった。



山芋<sup>やまいも</sup>

しんくしてほった土の底から

大きな山芋<sup>やまいも</sup>をほじくりだす

でてくる でてくる

でっこい山芋

でこでこと太った指のあいだに

しっかりと 土をにぎって

どっしりと 重たい山芋

おお こうやって もってみると

どれもこれも みんな百姓の手だ

土だらけで まっくろけ